

被虐待者のエンパワメントからの学び ～保健師学生と助産師学生の視点～

齋藤 茂子・狩野 鈴子

概 要

保健師、助産師の基礎教育課程の中で虐待の当事者から直接学ぶ機会は乏しい。今回、音楽活動を行っている被虐待者の『コンサート&トーク』をとおして保健師および助産師学生がメッセージとして受け止めた内容や、その視点を分析し、リスクの高い健康課題を有する当事者のエンパワメントについて学習する意義を検討した。学生にとって当事者から直接学ぶことは、現実の理解につながる事がわかった。また、人々の人生、生命、生活に関わる看護職者としての役割認識を高めた。特に虐待という健康リスクが高い課題について学ぶことにより、当事者のエンパワメントについて学習する良い機会となった。

キーワード：エンパワメント、虐待、当事者、保健師学生、助産師学生

I. はじめに

子どもの虐待やいじめ等の問題は健康上のリスクが高く、子どもたちの人権や安全を危惧する健康課題として浮上し、近年においては様々な取り組みが行われようになってきた。

虐待等の課題は、保健師、助産師の基礎教育課程の中でも重要な健康課題として取り上げられているが、直接、当事者から学ぶ機会は極めて乏しい。昨今においては、ケアにおけるエンパワメントの原則として当事者主体の問題解決や問題解決を支えるネットワークと資源の充実が求められており（安梅2004）、看護職者が当事者に学ぶ機会は重要である。

2007年度の文部科学省現代的教育ニーズ取り組み支援プログラムに、島根県立大学短期大学部出雲キャンパスのプログラム『地域を基盤とする看護教育への変革～自主グループ支援ネットワークの構築～』（以下現代GPとする）が選定された。

我々は、上記のプログラムの一環として、育児放棄を主とする児童虐待やいじめを受けた女性（以下A氏とする）とその夫を公演者とする『コンサート&トーク』を企画した。

参加した一般市民や出雲キャンパスの学生および教職員は、過酷な体験にもかかわらず、夫やその家族の支えにより克服への道を歩むA氏の歌声に感動し、貴重な時間を過ごした。

コンサートでは、参加者が児童虐待を身近に感じ、理解を深めたことは勿論であるが、当事者が行っている音楽活動の趣旨と本企画の趣旨を摺り合わせることで、被虐待者のエンパワメントについて学ぶ恰好の機会となった。

今回、コンサートに参加した地域看護学専攻学生および助産学専攻学生が当事者からの学びを、さらに活かすために、それぞれの教育科目の中で学生同士のディスカッションを行い、学びを深めた。ディスカッションで得られた保健師と助産師としての視点の特徴を分析し、保健師・助産師基礎教育において虐待問題等、健康リスクの高い課題を有する当事者のエンパワメントについて学ぶ意義を検討したので報告する。

II. 『コンサート&トーク』の概要

1. 『コンサート&トーク』企画までの経過・趣旨・反響

筆者らは、過去においてA氏のコンサートで深い感銘を受けた。もっと多くの人々にA氏の

メッセージを届けたいという思いを実現するために、2008年5月、地域の健康課題に取り組む現代GP主催のフォーラムに位置づけて『コンサート&トーク』を企画した。

今回の企画では、育児放棄等の虐待をきっかけとして、いじめ、うつ状態、アルコール依存などの過酷な体験をしたA氏がパートナーとともに自分の人生を問い直し、これからを生きようと音楽活動をとおして努力している姿勢から体験者のエンパワメントに焦点をあてた。

「同じような体験者に声を届けたい、共感してほしいという一心な気持ちで音楽活動を行っている」と公演者の二人は語る。さらに、「歌をとおして多くの人々とつながっていったら」との思いも強い。

A氏と夫の趣旨と現代GPの趣旨を摺り合わせて広報活動を行い、一般45名、出雲キャンパス看護学科学生45名、地域看護学専攻学生26名、助産学専攻学生15名、教職員20名の参加を得て開催することができた。

コンサート参加者からは、改めて一生懸命生きることの意味を考えさせられた、周囲の子どもたちに心を寄せること、パートナーとしての夫の存在の意味、いろいろな事に気づく機会になって感謝している、ひたむきに生きようとされている二人に今後の活躍を祈りたいなど、多くの感想が寄せられ、参加者自身のエンパワメントにつながったといえる。

また一方、A氏と夫は、コンサート終了後、「もっと心の痛みを克服した過程を詩やトークに織り込みたい」と次の活動への抱負を語り、今回の企画が二人にとっても今後への一ステップとなった。

2. A氏とパートナーの音楽活動

ここでは、二人の代表作である、A氏作詞「要らない子」を紹介する。この詩にパートナーである夫が曲をつけた。

「要らない子、

要らない子って言われてた
 役立たずって言われてた
 死んだ方がまだと言われてた
 幼い私はそれをいつの間にか信じていた
 生まれてきた事を恨んでいた

孤独と絶望の中で
 居場所を探して彷徨っていた
 私の心は壊れてしまったけど
 死にたいと思ったけど
 それでも私は生きて来たわ
 ボロボロだけど生きて来たわ
 自分を信じたいけど怖くてうまく進めない
 見えない鎖が重たくて
 どんなに挫けそうでも決して諦めたりしないわ
 もう二度と自分を見捨てない
 心はひどく痛むけど
 不器用すぎて格好悪いけど
 これから私は私の人生を
 取り戻して見せるわ
 そっと私は私を抱きしめる
 今まで良く頑張ってきたね

「幼い頃の私は、いつもお腹を空かせて骨と皮のように痩せていた。ガスや電気が止められた団地の一室に放置され、何日も両親が帰ってこなかった。」トークで綴られるA氏の幼い頃の体験の数々は、我々の想像を絶するものであった。

その後A氏は、同じ高校に通う音楽友達として今の夫に出会う。うつ状態やアルコール、たばこに依存することを体験しながらも夫の大きな支えにより、音楽活動を開始する。現在、A氏のお腹には新しい命が宿っている。

Ⅲ. 学習方法および分析方法

1. 対象と学習方法

『コンサート&トーク』をうけて、地域看護学専攻（以下保健師学生とする）の学生と助産学専攻学生（以下助産師学生とする）それぞれが、虐待についての視点の特徴を学生相互に学習することを目的に、授業の一環としてディスカッションを行った。学習を行った時期は記憶が薄れないよう、コンサート終了一週間後（2008年6月）であり、学生が専攻科に入学して2ヶ月を過ぎた時点である。授業の進め方は科目担当者の裁量に任せた。

保健師学生と科目履修生30名（うち、コンサート不参加者4名）は、「地域ケアシステム論」

の講義の中で個人ワークと4～6名によるバスセッションを行い、その内容を記録に残した。

助産師学生15名は「助産診断技術学演習Ⅲ：母子」の講義においてフリーディスカッションを行った。

2. 分析方法

1) 保健師学生の場合

設問①《コンサートによる二人のメッセージを、どのように受け止めたのか》に対するディスカッションの記録の内容を要約してコード化し、意味内容の類似性に従い、複数のコードをまとめ（サブカテゴリー）、さらに共通性のあるグループを集めてより上位のグループ（カテゴリー）とし、意味内容がわかりやすい表現で命名した。

また、《保健師に必要な虐待に関する視点で何を感じ、何を考えたか》という設問②についても設問①と同様にディスカッション記録の内容を要約し、類似した内容を分類してカテゴリー化した。以上については、妥当性を高めるために2人の研究者の合議により行った。

法律や制度による今日の虐待に関する対策から（中谷2008）に基づき、第1次予防から第3次予防までの取り組みに対して、学生が気づいた保健師としての視点（カテゴリー）を当てはめ、今後の学習課題を検討した（図1）。

2) 助産師学生の場合

今回の企画についてどのように感じ、考えたか自由にディスカッションを行ない、その内容を保健師学生同様、カテゴリー化した。また、妥当性を高めるために2人の研究者の合議により行った。

3. 倫理的配慮

学生に対しては、虐待等の健康リスクの高い課題について、さらに学習を深め、地域看護学専攻学生と助産学専攻学生の視点の違いや共通点を理解するという学習の目的を口頭で説明した。コンサートの公演者に文書で説明し、同意を得た。

IV. 学生同士のディスカッションの結果

保健師学生が当事者である被虐待者からのメッセージを、どのように受け止めたのかについて表1に示した。学生が受け止めたメッセージの構成概念は、以下の6つ領域に大別された。

その領域別のカテゴリーは、1) 同じような体験をしている人に対して送られているものについては、『相互のエンパワメント』、2) 社会に対して送られているものについては、『現実に対する理解』、『被虐待児の気持ち』、『被虐待児の今後』、3) 親や家族に対して送られているものについては、『親や家族の存在』、『親に対して』、4) 周囲のサポートやネットワークの必要性に関するものについては、『支援環境づくり』、『サポーターの存在』、5) エンパワメントについての学びは、『人の生きる力』、6) 学生自らに置き換えた自己認識においては、『当事者をとおして』、『自分への置き換え』、以上にまとめられた。

全領域における要約したバスセッションの記録は、97コード、33サブカテゴリー、12カテゴリーに形成された。

また、保健師に必要な虐待に関する視点と学生が気づいた視点を比較検討した結果を図1に示した。学生が気づいた点、23のカテゴリーを第一次、第二次、第三次予防に区分したが、第一次、第二次予防についての視点に比較し、第三次予防についての認識は乏しく、具体的な支援について必要性は認識されているが、支援方法に関する記述は少なかった。

助産師学生ディスカッションの内容を表2に示した。学生の視点は『当事者から聞くことの大切さ』、『家族との関係』、『支援の必要性』、『ネットワーク』の4つのカテゴリーにまとめられた。

支援の必要性として「存在に気づく」こと「役割を考える」ことは意見が多く出たが具体的な内容には到っていない（表2）。

V. 考 察

1. 同じような体験している人に対するメッセージ

表1 保健師学生が受け止めた被虐待者からのメッセージ

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
体験者へ	相互のエンパワメント	出会いと体験	<ul style="list-style-type: none"> ・出会いにより互いに高められる存在になれる ・虐待、育児放棄を受けた人の気持ちを知って予防する ・どんな体験をしていても変わる ・体験していない方に生きることの意味について問いかける
		一人じゃないよ	<ul style="list-style-type: none"> ・あなたたちは一人じゃないよ ・人に理解してもらいたい、他の人を救いたいという思い ・同じような体験をした方への心のケア ・生きようと思わせ、勇気をくれる
社会に対して	現実に対する理解	被虐待児の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待されている子どもの存在を知ってほしい ・A氏が体験したような現実を皆に知ってほしい ・現実をとおして何かを感じてもらえたら嬉しい ・虐待といえば、身体的なイメージが強かった ・虐待、育児放棄などの問題を少しずつでよいのでわかってほしい
		被虐待児の気持ちの理解	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待されている子どもの気持ちを知ってほしい ・A氏の思いや考えに共感し、少しでも理解してほしい ・社会全体に現実を知ってほしい
		虐待は身近なことである	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待はめずらしいことではなく、身近なことである ・自分には関係ないことだと思うのではなく、身近なこととして考えてほしい
		虐待防止	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待防止・育児放棄の防止 ・虐待のない社会にする ・自分と同じような虐待を受ける子どもが増えないでほしい
	被虐待児の気持ち	ただ愛されたかった	<ul style="list-style-type: none"> ・ただ愛されたかった・愛情がほしかった ・苦しい思いだったけど愛をもって接してほしい ・虐待されても愛されなくても子どもは親を愛している。だから愛されたいと願ってしまう ・歌を聞いて虐待がどんなものか知ってほしい ・何よりも自分を理解して愛してほしい
		認めてほしい	<ul style="list-style-type: none"> ・きっと多くの人が、K氏と同じように認めてもらいたいと思っている ・自分のありのままを認めてほしいと思っている
		辛くて苦しい	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待されることはとても辛くて苦しいこと ・孤独で淋しかったが、どうすることもできなかった子どもの気持ち ・やり場のない思い ・親にさえ認めてもらえない、愛してもらえない辛さ
		傷つきやすい	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもは敏感で傷つきやすい ・子どもは傷つきやすいことを大人に知ってほしい ・現実から逃げたかったが、お酒やたばこへの依存では救われず傷つくばかり
		自分を責める	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待されると自分が悪い子だからと自分の責任として追い込む ・虐待されると自分を責めることによって納得しようと考え、さらに自分を傷つける ・親の愛がないのは自分が悪いと思っているので、誰にも言えず心の中で閉じこもる ・自分を責めてしまうので追い込まれてしまう
		生きていたい	<ul style="list-style-type: none"> ・生きていたい、どんな状態でも生きていたい ・リストカットやうつなどを体験しても生きようと思う
		子どもは逃げられない	<ul style="list-style-type: none"> ・現実から逃げられないので、子どもなのでどうすることもできない ・子どもは逃げる術を知らない
		被虐待児の今後	心に残っている
あきらめないで希望をもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・辛いことがあっても必ず希望がある ・あきらめないこと ・一生懸命生きることが大切、いつか必ず幸せになれるはず 		
親・家族に対して	親や家族の存在	親の愛は当たり前	<ul style="list-style-type: none"> ・家族に愛されて育つことは当たり前のことではないのか ・親の愛は当たり前じゃないか
		愛されることは子どもの幸せ	<ul style="list-style-type: none"> ・家族に愛されて育つことは幸せなこと ・人は、大切な人、身近な人に愛されることで自分を認めていくことができる ・子どもの幸せは、物などではなく愛情が大きく影響する ・無償の愛が子どもには必要である
	親に対して	当たり前にしてほしい	<ul style="list-style-type: none"> ・愛されることは特別なことでもあり、当たり前にしてほしい ・育児放棄する親にならないで ・言葉や態度は使い方によって相手に大きな心の傷を負わせる
		人は一人で生きられない	<ul style="list-style-type: none"> ・人は一人で生きられない ・ありのままを認めてくれる存在が必要である ・親の存在は絶対的なものである ・人とのつながり、関係は大切に

周囲のサポート	支援環境づくり	安心できる場	<ul style="list-style-type: none"> ・安心して生きていける場 ・周りに目を向けて安心して生きていける場
		安全な環境・フォローする環境	<ul style="list-style-type: none"> ・虐待を受けた子には安全な環境が必要 ・虐待を受けている人を救い出すには、まず刺激のない環境づくりが大切 ・フォローする環境の大切さ
	サポーターの存在	支え合い	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで支え合って生きているということ ・みんな一人では生きていけない。
		夫の支え	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちを分かち合える人、支え合える人、夫の存在の大きさ ・夫への感謝が表現されている
受け入れ、支えてくれる人		<ul style="list-style-type: none"> ・心の傷や困難を乗り越えるために自分をありのまま受け入れて支えてほしい ・A氏は今まで支えてくれた人たちのおかげで、その体験を表現している ・人から愛されることの喜び 	
	気づくケア・差しのべるケア	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの人が気づいてあげることが必要である ・自信がなくなってしまう。その時に手を差しのべる人が必要である ・誰か、小さいときに手を差しのべてくれる人がほしい 	
エンパワメント	人の生きる力	人間の力・たくましさ	<ul style="list-style-type: none"> ・人間の力 ・虐待されても強く生きていける
		虐待に負けず生きてきた	<ul style="list-style-type: none"> ・育児放棄で辛い日々を過ごしたが自分は現実に負けず生きてきた ・育った環境でとても苦しい思いをしたけれどそれでも頑張って必死で生きてきた ・生きる意味を問いかける ・私は今、こうして生きているよ ・体験していない方に生きることの意味について問いかける
ネットワーク	つながり	歌でつながりたい	<ul style="list-style-type: none"> ・歌でつながりたい ・虐待されている人たちと一緒に心を癒していけるネットワークを結びたい
		人とつながりたい	<ul style="list-style-type: none"> ・人とつながりたい ・人との関係に大切なつながり
学生の自己認識	当事者をとおして	親の愛情に気づいた	<ul style="list-style-type: none"> ・生の声を聞いて虐待を実感した ・「ただ愛されたかった」という言葉で、我が身を振り返った ・当たり前を感じる親の愛情を受けられる有り難さ ・普段何気なく接している親に、たくさんの愛情を注いでもらっているのだと気づいた
		生きることの意味	<ul style="list-style-type: none"> ・生きること、生きていくための強さ ・人間として生まれてきた以上、生きる意味がある
	自分への置き換え	自分と向き合う	<ul style="list-style-type: none"> ・いつか必ず楽になれる ・生きることが辛くても自分自身と闘い、時間をかけて自分と向き合うこと
		変わる	<ul style="list-style-type: none"> ・その人が変わるには大変な勇気が必要である ・どんな体験をしていても変わる

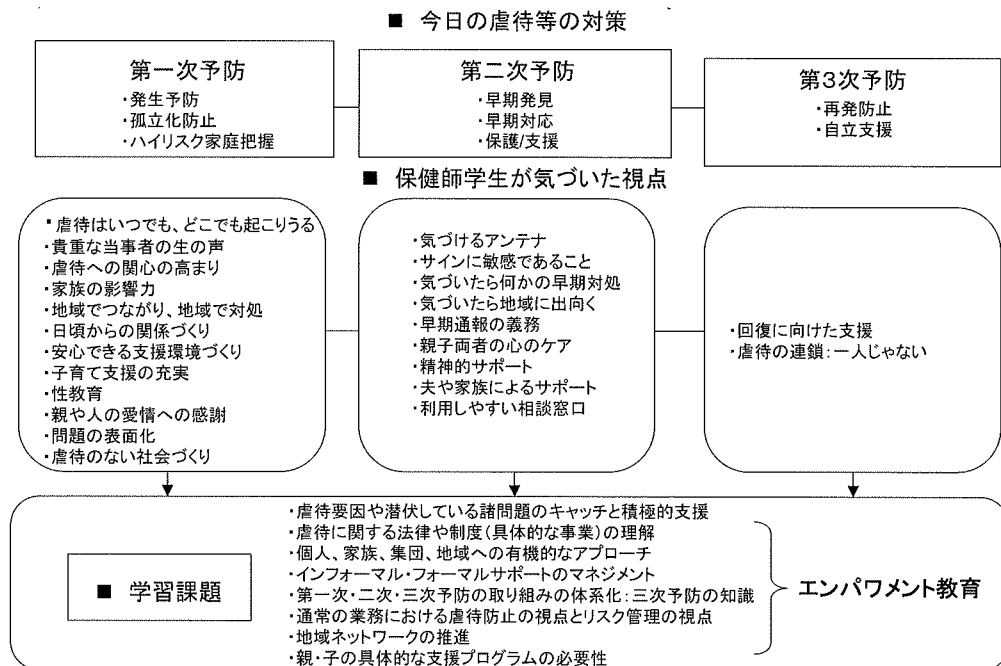


図1 保健師に必要な虐待に関する視点と学習課題

表2 助産師学生の視点

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
当事者から聞くことの大切さ	被虐待児の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・講義で母性の心理を習ったが実際の声を聞く機会は貴重 ・当事者の方の想いが聞けて良かった。 ・理解しようとしても当事者でないとわからないことがある ・このような機会は貴重 ・事実を知ってもらいたい。同じ体験をしているのはあなた一人ではないというのをわかって欲しい。という想いを知った ・学生の頃虐待を受けている子どもの施設に行った ・具体的に何を感じているのかわからなかったが、こんな思いをしていたのかということがわかり、胸が苦しくなった ・想像を絶する苦しい体験であったと思う ・幸せな曲がなかった
	被虐待経験への想い	<ul style="list-style-type: none"> ・強さを感じた ・とてもつらい中生きてこられたことは大変であったが今があり嬉しい気持ち
家族との関係	夫の支え	<ul style="list-style-type: none"> ・支えとなる夫の役割は大きい ・心を許す夫との出会いがあったよかった
	母親への思い	<ul style="list-style-type: none"> ・親から離れることがどうしてできなかったのかという思い ・虐待をするかしないかは紙一重のところだと思う ・母親の愛情は大切 ・子どもをどう育てていくのかという不安について「連鎖」ということが強調されすぎていないか
支援の必要性	存在への気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活している周囲にも同じような体験をした人がいるのではないかと考えさせられる ・当事者の方は多くの人を支えていかれる存在になる ・グループの存在を自分たちが知る必要性を感じた ・もっと周囲に目を向ける必要がある ・他の人に目をむけ関わりたい ・人を愛することの大切さ、幸せを感じた
	役割を考えること	<ul style="list-style-type: none"> ・個人への細やかな対応が必要である ・自分たちには何ができるのか ・家族背景とか家庭状況とか知りグループを紹介することはできる ・不安を抱える母親が誰かを頼れることのできる状況をつくるのが大切 ・勤務していたとき夫から虐待しそうという母の相談をされたがどう対応してよいかわからなかった ・助産師として何ができるのか考え続けたい ・女性の一生に関わる上でいろいろ考えながら母子にも関わりたい ・母親が虐待などしなくていいような支援を考えていかねばならない ・今後、虐待を受けた女性が母になり、育児をする過程に関わると思う ・視野を広く持ち考えていきたい ・一人ではないこと、安全でいられる場所をつくり、自ら立ち直ることができるようそばで支えること ・カウンセリングの必要性を実感した
ネットワーク	つながることの必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・人と人とのつながりをつくっていききたいということ ・つながることの大切さを訴えておられた ・コミュニケーションをとり、人とつながること、認められることで人は生きていけることを感じた ・お互いに癒しあえることのできる場、自己を認めていける場、安全が保障される場が必要である
	病院内外での連携	<ul style="list-style-type: none"> ・院内では外来、病棟と分かれており病棟では入院期間は1週間である ・この短期間での見極めも必要だが、まず外来との連携が必要 ・ハイリスクな人の見極め。「何がある」ということは一人では判断困難 ・対応にしてもチームでの対応が必要である ・サポート体制の大切さを感じた ・助産師として病院内に勤務しても地域との連携ができることが大切

A氏と夫は、音楽活動により、同じような体験をしている人を救いたいという強い気持ちをもっている。当事者による音楽をとおしたメッセージには、当事者相互のエンパワメントが期待できる。また、学生教育にとっては当事者主体を原則とするケアにおけるエンパワメントについて学ぶ恰好の機会となった。

2. 被虐待児・者の理解

看護系の学生とはいえ、健康上のリスクが高

い虐待の事例に遭遇する機会は非常に少ない。今回の企画において直接聞いた被虐待者からのメッセージは、当事者を理解する上でも学生にとって貴重な機会となった。

ディスカッションの結果から、学生は児童虐待という現実の理解、被虐待児の気持ち、被虐待児の将来について理解を示しているといえる。

子どもには固有の育つ権利があり、子ども時

代に育つ権利が損なわれると大人になってから基本的な人権を満たすことができないといわれている（女性ライフサイクル研究所1997）が、今回の学生による「親の愛は当たり前である」、「家族に愛されて育つことは当たり前」という表現が、今後の学習をとおして、子どもの基本的人権から捉えた親の愛、親の存在についての認識に深まることが望まれる。

子どもの生き残りにとって、親「ないしは代理」は欠かせない。どんなに虐待・乱用されている子どもでも親に依存する。依存しては、さらなる痛みを与えられ、それでもなお依存する（齋藤1994）といわれている。

今回、学生は子どもにとっての親の存在について「人は一人では生きられない」、「親の存在は絶対的である」と捉えている。また、自分に置き換える中で、親の愛情に気づき、生きることの意味、自分と向き合うことの大切さやどんな体験でも変わることができると捉えていることから自分の親の存在について改めて強く認識できる機会であったと考えられる。

3. 被虐待児・者のエンパワメント

学生たちは当事者の歌とトークをとおして人の生きる力、たくましさ、虐待に負けないで生きてきたことに共感している。

森田もエンパワメントの理想について、人間は生まれながらにみずみずしい個性、感性、生命力、能力、美しさをもっていると信じて述べている（森田1998）。さらに、エンパワメントについて、わたしたち一人ひとりが誰でも潜在的にもっているパワーや個性を再び息吹かせることである。すべての人が持つそれぞれの内的な資源にアクセスすることである。そのためには社会から受けた不要なメッセージや痛手の一つひとつ取り除いていかなければならないとしている（森田1998）。

学生たちのディスカッションの結果にもあるように、周囲のサポーターの存在や支援環境づくり、人と人のつながりをもつネットワークが重要であり、これが当事者のエンパワメントを高めているといえる。

さらに、虐待防止の意味からも、子どもが、今も将来も互いを尊重しあえる関係には、自己肯定感、自己コントロール力、自己決定力とい

う内面的な力をつけるエンパワメント教育が必要といわれている（女性サイクル研究所1997）。自己肯定感をはじめとする内面的な力や自尊感情は、日常の子育てとして小さい頃から意図的に養われる必要があるといえる。

また、藤内らは、エンパワメントについて住民が自分たちの生活に関わる問題を、自分たちの力で解決したりコントロールできることを経験することにより自信をもち、新たな問題に対する問題解決能力を高めることであると述べている（藤内2001）。このことから、幼少の頃からのエンパワメント教育が意図的に行なわれる必要がある。

学生たちは、自分の人生に置き換えながら過酷な体験は、いつかは希望につながることに時間をかけて自分と向き合えばいつかは変わる、変わるためには勇気が必要であると考えた。過酷な体験であれ、再び、潜在的な力を息吹かせる（森田1998）人生であるために、当事者のA氏にとっては音楽が大きな力を発揮しているといえる。

4. 保健師・助産師教育として求められるもの

1) 保健師学生の場合

本学の保健師教育課程において、虐待等、リスクの高い健康課題にふれる主要科目は、母子保健活動の一環として〔地域看護活動論Ⅰ：生涯をとおした健康づくり〕、虐待は家族システムの病理として捉えることとして〔家族ケア論〕、地域における虐待予防システムを学ぶ〔地域ケアシステム論〕、取り組みの実際について学ぶ〔地域看護実習〕などである。

保健師として必要な視点と学生が気づいた視点を比較検討し、今後保健師の基礎教育で必要とされる学習課題について考察した。

保健師の日常の活動としては、児童福祉法、母子保健法、児童虐待防止法等の法律により、市町村には、虐待の未然防止、早期発見を中心に積極的な取り組みを求めており、保健所や児童相談所などの都道府県には、専門的な知識・技術を必要とするケースへの対応や市町村の後方支援を求めている（中谷2008）。

保健師活動における育児支援を想定したとき、乳幼児の全数把握をしている市町村の保健師には、日常からの母子の健全育成とハイリス

ク家庭の把握と支援が期待されている。健康診査等、ほとんどの乳幼児に関わる機会をもっており、また、個別に支援が必要であれば、家庭訪問や乳幼児相談の業務により、一歩踏み出して家族に関わることができる。

具体的には、七堂が述べているように、保健師は全ての母親の不安をまずは受け入れ、不安の原因、それを強めている家族や環境、子どもの生活の様子、子どもの発育や発達段階、問題解決経験などを聴き具体的解決方法を提示しながら母親が自分のことに向き合い、育児行動を選択していく過程に付き合う（七堂2007）。学生は、安心できる場づくりをはじめとする支援環境づくりやサポーターの存在等の周囲のサポートの必要性に気づいている。周囲のサポートといっても、ここではインフォーマル・フォーマルサポートのマネジメント（白澤1994）が必要とされ、マネジメント力についても学習課題の一つといえる。

保健所や児童相談所には、要保護児童の早期発見・早期対応、保護、再発防止、子どもの心身の治療、親子関係の修復など自立に至るまでの支援が求められている。さらに子どもを守る地域ネットワーク化を推進する役割もある。

先行研究によると、虐待発生予防のための市町村保健師が着目している視点として「母子の情緒と状態」「母子の家族内や周囲との人間関係」地域における家族の生活の様子に着目した「家族の生活状況」今までの経過に着目した「母子の健康と生活歴」があげられている。また、保健師は地域でのさまざまな関係機関やネットワークを活用し、子ども虐待の不安がある家族を発見し、継続的に支援できる職種であると述べている（頭川2006）。

ネットワークづくりの視点は学生のディスカッションからも導き出された。しかし、虐待防止における第一次、二次、三次予防に区分した結果、中でも三次予防についての知識や認識は薄いと考えられた。

三次予防にあたる問題を回復する過程は螺旋状といわれている（桂浩子2006）。昨今において、グループ虐待問題を抱える親へのグループアプローチ（広岡智子2003）、虐待からの回復を支援するグループミーティング（東山良子2003）

など、虐待する親と虐待される子どもの心のケアのためにケアプログラムが開発されている。

アルコール依存からの回復、ドメスティック・バイオレンスによる外傷体験からの回復、子ども時代の心的外傷後の回復等、グループ形式プログラムによる治癒力は高いとされ、これは、グループメンバー間で起こるグループ・エンパワメントであると森田は述べている（森田2003）。基礎教育としては理解に止まるとしても、三次予防にも力点をおいた予防活動の体系的な理解が必要といえる。A氏のこれからの人生において、これまでの人生の克服の道のりは続く。

以上ことから、保健師の基礎教育においては、虐待防止を体系的に理解し、エンパワメント教育を意図した日常の活動ができる能力を身につけることが重要であるといえる。

今回の学生が気づいた視点をもとに保健師基礎教育の学習課題を取り上げるとすれば、1) 虐待要因や潜伏している諸問題のキャッチと積極的支援、2) 虐待に関する法律や制度および具体的な事業の理解、3) 個人、家族、集団、地域への有機的なアプローチ、4) 親をはじめ近場の支援者であるインフォーマルサポートおよびフォーマルサポートのマネジメント、5) 第一次、二次、三次予防の体系化：三次予防についての知識、6) 通常の業務における虐待防止の視点とリスク管理の視点、7) 地域ネットワークの推進、8) 具体的な親子支援プログラムの必要性等が考えられた（図1）。

2) 助産師学生の場合

2004年2月に厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課虐待防止対策室が「児童虐待死亡例の検証と今後の虐待防止対策について」公表した。調査結果によると、事例の特徴として、被虐待児の年齢構成は0歳児が38%、次いで1歳児が16%である。虐待の続柄は実母54%、ついで実父18%である。養育支援が必要となり易い要素として、養育環境に関するものが最も多く、ひとりおや家庭、内縁関係の家庭、養育者の状況として、育児不安、第1子出産時、若年出産、情緒不安、子どもの状況として、未熟児、子どもの疾患・障害などがあげられている（三枝2004）。

関連科目

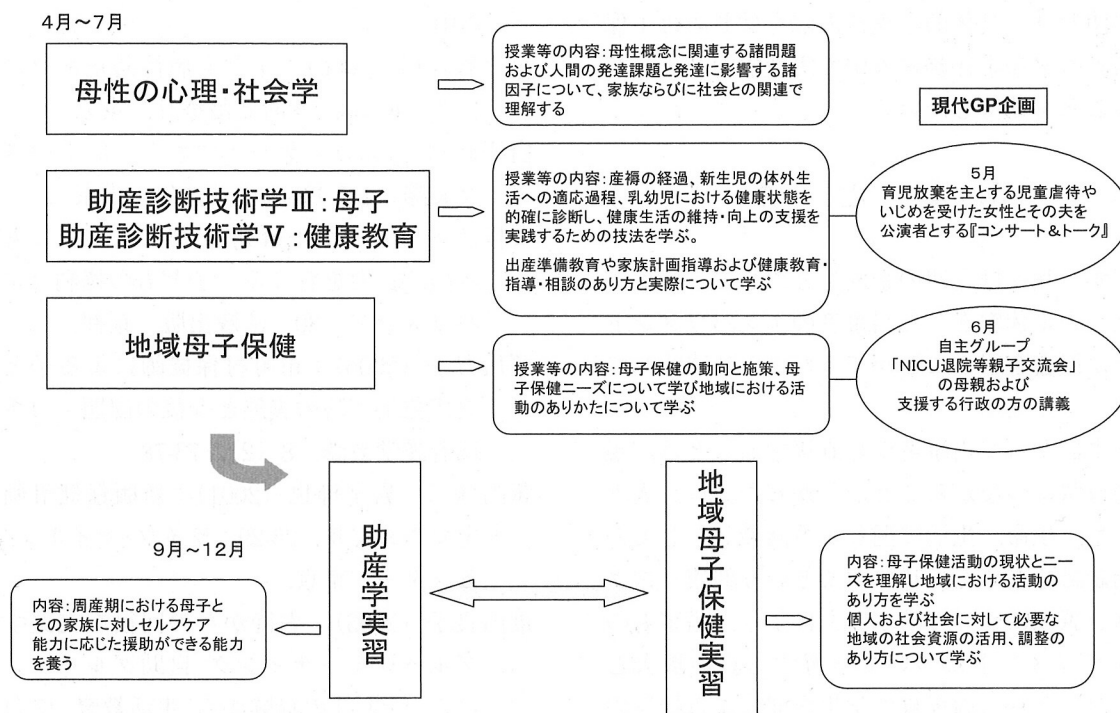


図2 助産学専攻の「子ども虐待」「エンパワメント」に関連する科目

助産師は妊娠初期から妊娠期間中、分娩時、育児まで継続的な関わりをもつことが多く、周産期からの予防的観点に焦点をおいて関わるができる。妊婦の定期健康診査での介入、リスク因子の早期発見、母性の形成、妊娠、出産、育児のプロセスにおけるストレスの緩和、親子、家族関係の形成など、虐待予防に関連して果たす役割を認識してケアを提供する必要がある。

しかし虐待等の健康リスクが高い課題は高度な援助技術が必要とされ、個人や一職種だけで支えられる問題ではない。医療の場でのチームワーク、地域でのネットワークを組み関わる必要がある（名古屋2002）。

助産学専攻の教育課程において学生は、虐待やエンパワメントについて、理論領域の「母性の心理社会学」、技術領域の「助産診断技術学Ⅲ：母子」「助産診断技術学Ⅴ：健康教育」「地域母子保健」の科目において学習する。そして実践領域では「助産学実習」「地域母子保健実習」での学習を行なう（図2）。今回の企画は、理論領域、技術領域の学習の途上におけるものである。他にも同時期に現代GPによる教育活動の一環として、NICUを退院した児をもつ母

親の自主グループ当事者および支援する行政からの話を聞く機会をもった。この企画も合わせて、学生はエンパワメントについて理解する機会となり得た。

学生の視点からも伺えるように当事者の話を聞くということは机上学習だけではわかり得ない「想い」を知ることができる。助産師学生は被虐待経験を克服し現在に至るA氏の話の中に、その強さを感じ、他者に向け、社会に向け発信している姿の中からエンパワメントの重要性を感じとったと考えられる。

また、今回は被虐待者のトークであったが、母親をはじめ、家族に関わる時、何らかの課題を抱えていないかという視点ももちアセスメントすること、実際に話を聞き共に考えていくことの必要性、信頼関係を築き、肯定的な母子支援をすることで母のエンパワメントを引き出していくことの大切さ、自分達の役割を認識し、専門職として個人的な関わりのみならずチームとしての支援、他職種のネットワークの必要性などを今後の課題として考える機会となり得たと考えられる。

我々は、保健師学生・助産師学生が共に後半

の実習において当事者からの学びを思い出し、エンパワメント教育を意図した母子および家族への関わり、具体的な支援方法をはじめ母子保健活動の実際を体験する中で実践能力を養ってくれことを期待したい。

VI. ま と め

まず、我々は今回の企画をとおして、学生が過酷な人生体験をした当事者のエンパワメントに学ぶ機会を得ることができたことに感謝している。

学生にとって当事者から直接学ぶことは、現実の理解につながるということがわかった。また、人々の人生、生命、生活に関わる看護職者としての役割認識を高めた。特に虐待という健康リスクが高い課題について学ぶことにより、当事者のエンパワメントについて学習する良い機会となった。さらに両専攻の学生合同による授業の展開ができれば、それぞれが置かれている立場で視点を養い、両専攻学生相互の専門性を理解することにつながると考えられる。また、改めてエンパワメント教育を意図した学習の意義について教員自身も気づかされた。

謝 辞

本報告に、ご協力いただいたコンサートの公演者ならびに授業に参加した学生の皆様に深く感謝いたします。

文 献

安梅勅江 (2004) : エンパワメントのケア科学
- 当事者主体チームワーク・ケアの技法 -,
4-6, 医歯薬出版, 東京.
斎藤学編 (1994) : 児童虐待, 20-21, 金剛出版,
東京.

三枝きよみ (2004) : 子ども虐待予防に関する
最近の行政の動きから, 助産師, 58 (3),
8-10.
塩之谷真弓 (2006) : 子ども虐待防止&マニ
ュアル, 42-53, 診断と治療社, 東京.
白澤政和 (1994) : ケースマネジメントの理論
と実際, 115-118, 中央法規, 東京.
女性ライフサイクル研究所 (1997) : 子ども虐
待の防止力を育てる 子どもの権利とエン
パワメント, 30, 法政出版, 京都.
頭川典子 (2006) : 市町村保健師による子ども
虐待発生予防の実態と今後の課題, 日本地
域看護学会誌, 8 (2), 73-78.
藤内修二, 岩室紳也 (2001) : 新版保健計画策
定マニュアル, 28-29, ライフ・サイエンス・
センター, 東京.
東山良子 (2003) : 虐待からの回復を支援する
グループミーティング 自助グループ「A
Cのつどい」の経験から, 生活教育, 47 (1),
22-25.
中谷芳美 (2008) : 保健師講座-対象別地域看
護活動-(第2版), 51-54, 医学書院, 東京.
名古屋恵美子 (2002) : 医療分野におけるソー
シャルワークとその活用のすすめ, 助産師
雑誌, 56 (12), 20-24.
七堂美香 (2007) : 保健師と家族支援, 現代の
エスプリ, 第6巻, 114-123.
林浩子 (2006) : 子ども虐待防止&マニユアル,
48, 診断と治療社, 東京.
広岡智子 (2003) : 虐待問題をかかえる親への
アプローチ 予防的グループから治療的
グループへの展開, 生活教育, 47 (1),
14-19.
森田ゆり (1998) : エンパワメントと人権,
17-18, 解放出版社, 東京.
森田ゆり (2003) : 子どもの虐待・DVハイリ
スクの親の回復支援: MY TREEプログラ
ム, 生活教育, 47 (1), 32-39.

Learning from Empowerment of a Person to be Abused: The Viewpoint of Community Health Nurse Students and Midwifery Students

Shigeko SAITO and Reiko KANO

Key Words and Phrases : empowerment, abuse, the person concerned,
community health nurse student, midwifery student

『島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要』投稿規定

1. 投稿者の資格

紀要への投稿者は、著者または共著者の一人が本学の専任教員であること。
ただし、メディア・図書委員会が認めた者はこの限りでない。

2. 投稿論文の内容は、国内外を問わず他誌での発表あるいは投稿中でないものに限る。

3. 論文は、和文または英文とする。

4. 原稿の種類

原稿の種類は、[総説]、[原著]、[報告]、[その他]であり、それぞれの内容は下記のとおりである。

[総説] それぞれの専門分野に関わる特定のテーマについて内外の知見を多面的に集め、また文献をレビューして、当該テーマについて総合的に学問的状况を概説し、考察したもの。

[原著] 研究が独創的で、オリジナルなデータ、資料に基づいて得られた知見や理解が示されており、目的、方法、結果、考察、結論等が明確に論述されているもの。

[報告] 内容的に原著論文には及ばないが、その専門分野の発展に寄与すると認められるもの。

[その他] 担当授業科目等に関する教育方法の実践事例などの報告、または、それぞれの専門分野の研究に関する見解等で、メディア・図書委員会が適当と認めたもの。

5. 倫理的配慮

人および動物を対象とする研究においては、倫理的に配慮され、その旨が本文中に明記されていること。

6. 原稿の執筆要領

原稿は原則ワードプロセッサで作成し、和文・英文ともにA4版の用紙に印刷する。

1) 原稿の書式

- (1) 和文：横書きで1行を全角で21字、1頁41行とする。図表を含め24枚以内
- (2) 英文：半角で84字、1頁41行、図表を含め12枚以内とする。

なお、和文の場合は原稿2枚が仕上がり1頁に、英文の場合は原稿1枚が仕上がり1頁に相当する。

2) 原稿の構成

(1) 和文原稿

- ① 表題：表題が2行にわたる場合、いずれの行もセンタリングする。
- ② 著者名：本学以外の著者の所属は、*印をつけて1頁目の脚注に記す。
- ③ 概要：300字以内の和文概要をつける。
- ④ キーワード：和文で5個以内とする。
- ⑤ 本文
- ⑥ 文献（引用文献のみ記載する）
- ⑦ 英文表題：英文表題からはページを新しくし、各単語の1字目は大文字とする。
(例：The Role of Practitioners in Mental Health Care)
- ⑧ 英文著者名：英文著者名は最初の文字のみ大文字、姓は全て大文字にして2文字目

以降に赤色でスモールキャピタルの字体指定（二重下線）をする。

(例：Hanako IZUMO)

和文・英文著者名の共著の場合、著者と著者の間には中点を入れる。
本学以外の著者の所属は、Key Words and Phrases の次1行あけて
脚注に*印をつけて所属の英語表記をする。

例)：Key Words and Phrases

* Shimane University

- ⑨ 英文概要：[原著]には、150語以内の英文概要をつける。見出しは赤色でゴシック体の指定(波線の下線)をし、センタリングする。Abstract
- ⑩ 英文キーワード&フレーズ：概要から1行あけて5個以内。見出しは赤色でゴシック体の指定（波線の下線）をする。Key Words and Phrases：

(2) 英文原稿

- ① 表題：表題が2行にわたる場合、いずれの行もセンタリングする。
- ② 著者名：本学以外の著者の所属は、*印をつけて1頁目の脚注に英語表記する。
- ③ Abstract：150語以内
- ④ Key Words and Phrases：1行あけて5個以内
- ⑤ 本文
- ⑥ 文献

(3) 図表および写真

図と写真はそのまま印刷可能な白黒印刷のもの。印刷が明瞭なものに限る。

図や写真は、図1、表1、写真1等の通し番号をつけ、本文とは別用紙に一括して印刷する。図・写真の番号やタイトルはその下に記入し、表の番号やタイトルはその上に記入する。なお、図、写真、表などの挿入位置がよくわかるように本文原稿右欄外にそれぞれの挿入希望位置を朱書きで指定しておく。

3) その他の注意事項

- (1) 外国人名、地名、化学物質名などは原綴を用いるが、一般化したものはカタカナを用いてもよい。
- (2) 省略形を用いる場合は、専門外の読者に理解できるよう留意する。論文の表題や概要の中では省略形を用いない。標準的な測定単位以外は、本文中に初めて省略形を用いるとき、省略形の前にそれが示す用語の元の形を必ず記す。
- (3) 本文の項目分けの数字と記号は、原則として、I, 1, 1), (1), ①, a, a) の順にするが、各専門分野の慣用に従うことができる。
- (4) イタリック体、ゴシック体などの字体指定は、校正記号に従って朱書きしておく。
- (5) 学内の特別研究費、文部科学省科学研究費などによる研究を掲載する場合は、その旨を1頁目の脚注に記載する。
- (6) 本文内の句読点は、「。」と「,」を使用する。
- (7) 和文原稿の英文表題と[原著]の英文概要、及び英文原稿の英文は、著者の責任において語学的に誤りのないようにして提出すること。

4) 文献の記載方法

- (1) 引用文献については、本文中に著者名(姓のみ)、発行年次を括弧表示する。
(例) (出雲, 2002)
- (2) 文献は和文・英文問わず、著者の姓のアルファベット順に列記し、共著の場合は著者

全員を記載する。

(3) 1つの文献について2行目からは2字(全角)下げて記載する。

① [雑誌]

著者名(西暦発行年):表題名, 雑誌名(省略せずに記載), 巻数(号数), 引用箇所
の初頁-終頁。

(例) 出雲花子, 西林木歌子, 北山温子(1998):看護教育における諸問題, 島根県
立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 3, 14-25.

② [単行本]

著者名(西暦発行年):書名(版数), 引用箇所
の初頁-終頁, 出版社名, 発行地。

(例) 島根太郎(1997):看護学概論(第3版), 70-71, 日本出版, 東京。

③ [翻訳書]

原著者名(原書の西暦発行年):原書名, 発行所, 発行地 / 訳者名(翻訳書の西暦
発行年):翻訳書の書名(版数), 頁, 出版社名, 発行地。

(例) Brown, M. (1995): Fundamentals of Nursing, Apple, New York. / 出雲太
郎(1997):看護学の基礎, 25, 日本出版, 東京。

④ [電子文献の場合]

著者名(西暦発行年):タイトル, 電子文献閲覧日, アドレス

(例) ABC看護技術協会(2004):ABC看護実践マニュアル, 2004-06-07,
<http://www.abc.nurse.org/journal/manual.html>

7. 投稿手続き

1) 投稿原稿は, 複写を含めて3部提出する。原稿右肩上部に, 原稿の種類を明記しておく。
ただし, 1部のみ著者と所属名を記載し, その他の2部については著者名と所属名は削除
しておく。

2) 投稿原稿を入力したフロッピーディスクまたはCD-ROMには, ①氏名 ②連絡先電話番号
③使用した入力ソフトおよび文書ファイル保存形式, を記載し, 査読終了後に最終原稿と
あわせて提出する。

8. 原稿提出

投稿原稿は, メディア・図書委員会が定めた期限内に, 完成原稿を図書館事務室に提出する。

9. 原稿の採否

投稿原稿について, メディア・図書委員会が依頼した者が査読を行なう。査読後, メディア・
図書委員会が原稿の採否等を決定する。査読の結果により, メディア・図書委員会が原稿の修
正を求めることがある。

10. 校正

印刷に関する校正は原則として2校までとし, 著者の責任において行う。校正時における大幅
な加筆・修正は認めない。校正にあたっては校正記号を使用する。

11. 掲載料

執筆要領に定める制限範囲内の本文, 図, 表について掲載料は徴収しない。別刷は30部まで無
料とする。特別な費用等を必要とした場合は, 著者が負担する。

12. 公表

掲載論文は, 本学が委託する機関によって電子化し, インターネットを介して学外に公表する
ことができるものとする。なお, 著者が電子化を希望しない時は, 投稿時にメディア・図書委
員会へ申し出ることとする。

島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要

第2巻 2008

2008年12月10日発行

発行所：島根県立大学短期大学部出雲キャンパス

(編集：メディア・図書委員会)

住所 〒693-8550 島根県出雲市西林木町151

TEL (0853) 20-0200 (代)

FAX (0853) 20-0201

URL <http://www.u-shimane.ac.jp>

印刷所：オリジナル

住所 〒693-0021 島根県出雲市塩冶町267-5

TEL (0853) 25-3108 FAX (0853) 25-0375

**Bulletin
of
The University of Shimane Junior College
Izumo Campus**

Vol. 2 2008

CONTENTS

(Original Articles)

- Frequency of Metabolic Syndrome in Community-Dwelling Elderly People—3 Areas Study in Shimane Prefecture—
Kazuya YAMASHITA, Yuri IYAMA, Ichie MATSUMOTO, Chiaki INOUE,
 Ayako MATSUOKA, Miyuki KAJITANI, Minae AGO, Shigeko Saito,
 Yoichiro Fukuzawa, Masanori KATAKURA, Michio HASHIMOTO, and Setsushi KATO 1
- Activate Factors Associated with Community Activities among the Elderly People
Ayako MATSUOKA, Shigeko SAITO, Mikiko ODA, Kazuya YAMASHITA,
 Tomoko ITO, Ichie MATSUMOTO, Reiko NAGASHIMA, Chiaki INOUE,
 Yuri IYAMA, Etsuko WADA, Noriko FUKUMA and Takayuki HARADA 7
- The Effects of Deception and Personality on Gaze
Yuichi IZUKA 15
- (Reports)
- Study on Empowerment Support to the Aged Living in Special Nursing Homes (Second Report):
 Analysis of Recognition and Action of Care Staff
Tomoko ITO, Maki KATO, Miyuki KAJITANI, Sayuri TSUNEMATSU,
 Nozomu MOROI, and Masashi KANETSUKI 23
- A Comparison of the Home Blood Pressure with Blood Pressure at Physical Check-Up in the Community-Dwelling Elderly
Kazumi TAWARA and Kazuya YAMASHITA 35
- Document Examination Concerning Problems After Associate Production Master Outpatient is Established
Aya KOMAZAWA, Midori MISHIMA, Reiko KANO and Miwako HAMAMURA 41
- Problems for Community Activity Development by the Dwellers
Mikiko ODA, Ayako MATSUOKA, Shigeko SAITO, Kazuya YAMASHITA,
 Tomoko ITO, Ichie MATSUMOTO, Reiko NAGASHIMA, Chiaki INOUE,
 Kaori YANO, Noriko FUKUMA and Taeko KATAISE 49
- Evaluation of the Basic Nursing Skills Support Program by Simulated Patient's Participation:
 The Practice Report in the 2007 Academic Year
Fumie BESSHO, Kazumi TAWARA, Yoko YOSHIKAWA, Ichie MATSUMOTO,
 Ayako MATSUOKA, Masako NAGASAKI and Yuri IYAMA 61
- Problems of the Basic Nursing Skills Acquisition for Nursing Performance Advancement
Ichie MATSUMOTO, Yuri IYAMA, Yoko YOSHIKAWA, Ayakao MATSUOKA,
 Masako NAGASAKI, Chiaki INOUE and Satoko AIKA 75
- The Evaluation of the Method for Designing Nursing Research Using the Label Work Technique in the Basic Nursing Education
Teruko ISHIBASHI, Reiko NAGASHIMA, Miyuki KAJITANI, Emiko TAKAHASHI,
 Kenji HAYASHI, and Yuka WADA 81
- Ability of Board of Education Members in the In-Service Education of the Trainee Participation Type
Teruko ISHIBASHI, Chitsuru MORI, Emi SAITO, Takami SASAO,
 Ritsuko TAKAHASHI, Yasuko ASAHARA, Hitmomi MORIWAKI and Miyoko YASUDA 91
- Evaluation of the Students' Attendance Support Software "ECILS" by Using Mobile-Phone
Minae AGO, Teruko ISHIBASHI, Miyuki KAJITANI, Isao SAKAMOTO,
 Toshihiro KANETSUKI, Masahiro YANASE, Shigeyuki SEKIGUCHI, Toshiaki MATSUO
 and Yutaka AKAKI 99
- Advances of Clinical Nursing Research Utilizing the Portfolio
Minae AGO, Maki KATO, Kazuya YAMASHITA, Yumiko KURIHARA,
 Michie ODAHARA, Masako SUIZU and Setsuko TAKEUCHI 107
- Portfolio Assessment at a Home Care Nursing
Yukari AGO, Miname AGO, Kazuya YAMASHITA, Maki KATO
 and Ayumi IWAIBARA 117

(Others)

- Learning from Empowerment of a Person to be Abused:
 The Viewpoint of Community Health Nurse Students and Midwifery Students
Shigeko SAITO and Reiko KANO 125